2005年度イタリア短期交換留学の報告

中川　実

1．はじめに

本学では，イタリア国立フェラーリ工業専門学校との協定内容の一つである短期留学を毎年春休み期間中に実施している。第１回の短期留学が2003年２月に行われて以来，今回が４回目である。2006年２月末から３月末にかけて学生３名と教員１名，通訳１名が１ヶ月間イタリアに滞在し，フェラーリの本社工場や車体整備の専門工場「ザナシー」に配属され，整備技術を修得する目的で実施された。

本稿では，出発までの経緯や行程，異国の地における体験や経験内容について報告し，今後の活動の記録としたい。

2．経　　緯

国立フェラーリ工業専門学校（以下フェラーリ校という）と交換留学に関する協定は，2002年４月に結ばれて以来交流を深めてきた。2006年４月には協定をさらに継続するための手続きを本学で交わし，今後さらに親交を深めていくことになる。本学教員の引率については，第１回のみで，２回，３回目は通訳の野田氏に引率を依頼し，短期留学を行ってきた。しかし，今回の４回目は，実習教員から筆者が引率者として同行する機会を得た。ただ，引率者の発表時期が遅かったので，具体的な準備は全て満足のいくものではなかった。

参加学生の募集については，本学の国際交流課を中心に企画され，11月５日（土）にイタリア短期留学の参加希望者募集の掲示がされた。参加希望者対象の第１回説明会が，11月14日（月）に開催され，２名の学生が参加した。内容は，イタリア短期留学行程の詳細，参加申し込書の記入，個人調査書の配布についてであった。その後，参加希望者対象の２回目説明会を１回目と同内容で11月18日（金）に実施し，４名の学生が参加した。参加申込みは，11月30日（水）に締切り，最終的参加申込者数は４名の学生であった。参加申込者対象の詳細な説明会を，12月７日（火）に開催した。内容は，日程表，費用，保険の説明についてであった。参加申込書の提出最終締め切り日は，12月12日（月）にした。なお，工場研修希望先アンケートの結果からフェラーリ本社３名，ザナシー１名の希望があった。前者は新車の製造・エンジンの組み付けを行い，後者は事故車損傷修理や塗装を中心に行うという，それぞれ魅力のある工場である。12月19日（月）に，参加学生４

名と本学学長との面談を行った。最終的には，フェラーリ校との調整の中で，フェラーリ本社２名，ザナシー２名と研修先が決定した。年が明けてからの１月18日(水）は，パスポート･保険申込みの説明と回収を行った。短期留学は，長期にわたりイタリアに滞在するので，語学力も必要と思われる。そこで,杉山講師を招いてイタリア語のレッスンを，１月20日(金)より２月10日(金)までの６回，学生のスケジュール（追再試験期間中）に合わせて実施された。２月14日以降は，引率者の野田氏と参加学生との顔合わせ，及びイタリア語レッスンの復習を行い，出発日２月22日(水）に備えた。

残念ながら,参加者の中から１名が,２月上旬ごろの雪の降る日に凍結した路面上で滑って転んでしまい，その時に左肩を強く打撲し肩より腕が高く上がらなくなり，場合によっては手術が必要と思われる大事故が起きた。その結果，重いものが持てないことと，参加メンバーに迷惑がかかることなどから，やむなくキャンセルしなければならなくなった。最終的には学生３名の参加で，研修先はフェラーリ本社が２名で，ザナシーが１名という調整結果で出発した。

3．研 修 の 詳 細

２月22日(水）に出発して，セントレアからフランクフルトで乗り継ぎミラノへ到着した。到着翌日，ミラノで１日市内観光を異国の地を味わいながら楽しんだ。(写真１）

次の日，モデナ郊外にあるコニーエントという街まで移動した。この街は，自然が豊富で環境豊かな街であり，高速道路インター近くにホームステイ先のカヴァツッチさん宅がある。日本を発ってから３日後の金曜夕方に到着した。カヴァツッチさんの家族一同は，学生達がこれからの生活でお世話になる初めての経験に期待と胸を膨らませている様子を捉えながら，学生を温かく迎えいれてくれた。(写真２）

今回の研修先のマラネッロ市は，人口１万５千人程の静かな田園の街であり，フェラーリ本社

写真１．スフォルツェスコ城前（ミラノ）

写真２．カヴァツッチさんの家族一同と学生

表1．　2005年度　行程表

日次	月　日	訪問地	交通機関	時刻	行程	食事
1	2月22日(水)	名古屋 フランクフルト ミラノ	LH737 LH3888	10：55 15：15 16：20 17：30	空路セントレアからルフトハンザドイツ航空でフランクフルトを乗り継いでミラノへ 到着後，ドライバートランスファーにてホテルへ (マルペンサ)　ミラノ泊	
2	2月23日(木)	ミラノ			ホテルで朝食後，午前：フリータイム 午後：　市内観光 サンタマリア・デル・グラツィエ教会にある最後の晩餐を鑑賞　ミラノ泊	朝
3	2月24日(金)	ミラノ モデナ	列車移動	4時～ 5時頃 モデナ 着希望	ホテルからミラノ駅へトランスファー 列車にてモデナ駅へ モデナからレンタカーでホームステイ先へ モデナ泊	朝
4～ 24	2月25日(土) ～ 3月17日(金) まで	マラネッロ	レンタカーで 移動		モデナ～マラネッロ，マラネッロ～ モデナへ専用車（レンタカー）で移動 IPSIA Ferrari，ザナシー，またはフェラーリ工場で研修　モデナ泊	朝 夜
25	3月18日(土)	モデナ フィレンツェ	午前移動 午後列車移動		レンタカーでモデナ駅へ 列車にてフィレンツェへ（ボローニャ乗換え） フィレンツェ泊	朝
26	3月19日(日)	フィレンツェ			ホテルで朝食後，フィレンツェでフリータイム フィレンツェ泊	朝
27	3月20日(月)	フィレンツェ ローマ	午前列車移動		ホテルで朝食後，列車でローマへ フィレンツェ～ローマへ列車で移動 午後：ローマ自由行動　ローマ泊	朝
28	3月21日(火)	ローマ			朝食後， 午前：ローマ観光 バチカンミュージアム，ミケランジェロの最後の審判で有名なシスティーナ礼拝堂を訪問 午後：自由行動　ローマ泊	朝
29	3月22日(水)	ローマ フランクフルト	LH3841 LH736	10：15 12：15 13：50	ローマで自由行動 午後：ドライバートランスファーで空港へ	朝
30	3月23日(木)	名古屋	LH736	09：15	セントレア到着	

が街のシンボルのひとつとなっている。一方，フェラーリ校は街の中心に近く，工場と博物館の途中に位置しており，5学年制で学生数は500人程の規模である。研修先へは，毎日レンタカー(写真3）で通い，朝7：30にはホームステイ先を出発して7：50ごろ到着（約20分程）で毎日送迎した。朝の出発予定時間に間に合わない者や，雪による路面凍結で予定時刻に着かなかった日もあったが，約3週間の長い研修は始まった。

初日は27日(月）で，配属先の工場であるフェラーリ本社に野田氏と学生2名が事務所に案内され，3週間分の工場通行許可書の手続きを行った。フェラーリ本社（写真4）では，赤い繋ぎの作業着2着と靴1足をそれぞれ支給され，作業着着用と工場通行許可書で工場内に入る決まりである。作業内容は，8気筒及び12気筒のエンジン組み立てについて，工場内は流れ作業ラインがあるわけでもなく，何人かで1つのエンジンを組み立てるようになっている。当日割り当ての生産数がクリアできたら，仕事は終了である。

写真３．送迎に使用したレンタカー

手続きの終了後は，野田氏，筆者と学生１名はザナシーに向かった。ザナシーは，フェラーリ本社から車で５分と非常に近い位置にある。社長を始め，８名の従業員で出迎えてくれた。学生は，社名入りの作業着２着を支給され，事故車で入庫したフェラーリ360を担当し，配線の取り外しやパーツの取り外しから始め，ボデーの修復作業の一部を行った。（写真５）工場内はフェラーリ車ばかりで，古いタイプから新しいタイプまでそれぞれ入庫しており，高級感のある作業現場である。学生にとって，独りの作業は心細いと思われたが，イタリア人の暖かさとユーモアで緊張感も少しは緩和されたようであった。

昼食は，本社工場の近くにある社員食堂でとることができる。部門により昼食の時間差はあるが，12:00～14:00までの間に休憩を挟んでとることになる。学生達は，フェラーリのＦ１（フォーミュラ１）開発関連の社員や，組み立て生産関連の社員と一緒に食事をとれることに非常に感動し，工場の社員や食堂の店員とも友好関係を深め，最初は緊張して馴染めなかったが，最後の方では工場の社員と食堂へ行けるようになり，大変くつろげる場所となった。食堂メニューも日毎で変更され，大変ボリュームのあるイタリアならではの食べ物が選べるようになっていた。また，ドリンクは多種類のジュースがあり，さらにアルコール（ビール，ワイン）類なども注文でき，真昼の間から飲んで仕事をすることは，日本では慣れない感覚であると感じた。フェラーリ本社とザナシーの休日については，一般的に土，日曜日であるが部門ごとに仕事の段取りと調整がつけば，平日の日でも休むことができた。

写真４．フェラーリ本社前

写真５．ザナシーでの研修

そんな時間を利用して，日帰り旅行で近くの観光地を列車など利用して訪れるのも一つの研修であった。学生の中には，計画を立ててパロマ，ピサ，ヴェネツィア，ボロー

写真６．ピサの斜塔前

ニャ，サン・マリノ共和国の街等を訪れて余暇を満喫していた。(写真６)

マラネッロの街は，フィオラノサーキットというフェラーリ専用のテストコースもあり，試走中は街中エンジン音が鳴り響き，初めのうちは驚いたが，聞き慣れてくるとあまり驚かなくなり，慢性化（麻痺）した感じがして，高級感すら薄れていた気がした。まさに，フェラーリの街である。(写真７)

見学研修は，フェラーリ博物館，ドゥカティ本社工場・博物館などイタリア校のニコ校長やエミリア先生、フィリッポ先生の協力を頂いて行った。

筆者らは，午前中フェラーリ校の図書館でメールの確認，今後の研修予定の打ち合わせ，レバンテ計画（40年記念事業）の企画調整，フェラーリ校の先生と懇談等を行い午後からは，ザナシーに出向き学生の作業の進展具合を視察しその結果を本学へメールで報告した。また，研修の予定場所にはなかった「トニー・オート」（フェラーリ専門の整備工場）に出向き，過去の研修生のお世話になった挨拶と，毎年８月に行う研修旅行で，見学をすることができるお礼を行った。筆者は，フェラーリの整備技術修得のために作業現場を見学させて頂き，ここは，フェラーリ校から徒歩で数分としか離れていないので，地理的には迷うことなく安心して工場通いを行うことができた。

写真７．フィオラノサーキットで試走

実は，研修開始日より10日が経過した３月３日(金)，学生１人が体の不調を訴えフェラーリ本社の研修を休んだ者がいた。出発前より本人の体の状況は聞いていたが，アトピー性皮膚炎による発疹と，熱も39度近くあり痒いより痛い状況で夜も眠れない日々が続き，日増しにひどくなり，ホームステイ先の皆が心配する中で，モデナ市内にある病院に行くことになった。病院では，原因を突き詰めるため検診を行い，もっと詳しい検査が必要だと告知され入院が必要と診断された。その結果，環境の変化とストレスなどが原因だとされ，１週間入院後の10日(金）に退院した。翌週13日(月）よりフェラーリ本社に復帰した。学生は，工場で社員の皆が心配してくれたことや，暖かく迎えてくれたことに感謝して，１週間分の遅れを挽回する気持ちで一生懸命残りの研修を

取り組んだ。学生にとっては，異国の地の病院の１室でという特異な体験をし，医者，看護婦を始め色々な人との出会いや経験をすることで，技術の修得という研修とは異なるが，病院での貴重な体験を得たことは，生涯忘れることができない思い出として残ると思う。なんと言っても，ホームステイ先の家族の協力があったからこそ無事に退院することができた。

研修最終日（３月17日(金)）の夕方，フェラーリ校の図書館内でニコ校長主催の研修修了式が行われた。(写真８）学生たちは，１人１人研修修了書が手渡されると研修内容を振り返りながら無事修了したことを実感していた。また，夜にはエミリア先生のお宅に招かれ修了記念パーティを開いて頂き，学生たちも大変お世話になった感謝の気持ちを込めて，お礼の挨拶をして研修を締めくくった。

写真８．研修修了式

研修期間は短い間であったが，ホームステイ先には，我々を家族同様として面倒を見ていただき，楽しく過ごせた日々を思い出し，中には涙の別れをしてきた者もいたので，研修参加者全員感慨深げであった。

ホームステイ先を後にして，列車でモデナ駅からフィレンツェに移動した。フィレンツェには，市内を観光して２泊した。また列車でローマへ移動し，歴史的遺物や美術品を現地ガイドつきで見学することができた。最終日の３月22日（水）は，朝早くの移動で13：50発のフライトでローマを発ち，フランクフルト経由の機内泊で翌朝にセントレアに無事帰着した。

４．ま　と　め

短期留学実施時期は，これまで４回とも３月の春休み期間で行ってきた。本学で言えば３月は２級自動車整備士取得に向けて学生，教員ともに重要な時期である。一方，フェラーリ校では，９月より新学期が始まり，３月頃は学期末試験が行われる時期である。留学時期を本学の都合で合わせるとしたならば，８月頃が妥当ではないだろうか。本学は，夏休みの期間中であり参加学年の本科１年生，専攻科だけでなく，本科２年生に対しても参加を集える。フェラーリ校は，９月より新学期を迎えるための準備で忙しい時期かも知れないが，イタリアからの交換留学生が本学に来学する７月頃と近い時期にすることで，より深い交流が望めると考える。次に，現地での移動手段としてレンタカーを使用したことは，今回のような緊急入院の患者学生が出た場合にも有効である。ただし，事故の心配を考えると引率者に負担がかかることは避けられない。

研修派遣学生数３名は，少ないと感じた。研修生としてフェラーリ本社，ザナシー，トニー・オートと３工場あるので，１工場２名ずつ合計６名程が研修先として受け入れてくれると，丁度い

い具合であると思う。宿泊先がホームステイだったのは，最初戸惑いもあったが，実際滞在をしてみると，学生引率者ともに異国の文化を肌で感じ取り，コミュニケーションをとる場所としては最適な環境であった。疲れ切って帰宅後の夕食が用意されていることも大変ありがたいと感じた。語学力を少しでも身につける為には，生の言葉を聴き，話し，理解をすることが必要である。お世話になった家族は，幸い英語が話せ通じたので交流を深めるには，特に問題は無かった。しかし，大部分のイタリア人は英語を使用しないので，事前に語学力を付けておく必要がある。そこで，本学の行う出発前のイタリア語レッスンは，日常会話を中心としたレッスンとし，短期留学に参加する学生全員が必ず受講できるように日程を組む必要があると感じた。

今後は，希望調査アンケートを４月上旬のオリエンテーション時から実施し，アンケート結果を吟味しながら興味を示す学生の把握や参加募集人数の確保，技術研修内容の立案を勧めて，少しでも満足のいく充実した短期留学を行う必要がある。また，出発前に多少の問題点はあったが，短期留学の行程中は研修を中断する学生も無く順調に実施でき，全員が無事に帰国できたことは，筆者らにとって幸いであった。今後の交換留学が，学生にとって満足のいく研修内容にしていくとともに，継続して行うことを切に願う。

最後に，この短期留学を実施するにあたり多大な協力を頂いた本学の先生方，ホームページの作成から近況報告をして頂いた吉田（立）教授，研修先の調整をして頂いた学園本部の蜂須賀先生，株式会社 JI コーポレーションの方々には，ここに深く感謝の意を表します。なお，詳細はホームページで公開しています。http://www.nakanihon.ac.jp/~italy/

参　考　文　献

１）吉田立：中日本自動車短期大学論叢　第34号（2003），イタリア短期交換留学の報告 p.115 -119